

障害児支援 可能性信じて

NPO法人あかり 川岸恵子さん(59)・古堺義通さん(71)に聞く

コミュニケーションが苦手、じっと座ってられない、言葉が出ないなど発達障害や知的障害のある子らを支援するNPO法人あかり(久喜市)。代表理事の川岸恵子さん(59)と統括責任者の古堺義通さん(71)が2006年に2人で立ち上げ、活動は10年目に入った。県の推計では、発達障害の症状を示す15歳未満は県内に6万人余。広がる支援への思いを聞いた。

「障害も個性のうち、積極的にとらえる動きが広がっています。」



川岸「支援は、一人の人間として認めることから始まります。例えば、知的レベルは高いのに、集団の中で一番になれないとパニックを起こす子や、飛び抜けた記憶力で何年分ものカレンダーを覚えていて、生年月日を言うとその曜日を覚えてくれる子もいます。驚きと尊敬の連続です」

古堺「この子もすばらしい可能性を持っていると思います。医者から『将来も歩くことができないし、話すこともできないだろう』と言われた子がいました。ある日、一瞬立ちどろとした



小冊子「あかりの想い 100年後のあなたへ」と川岸さん(右)と古堺さん

NPO法人あかり 久喜特別支援学校のPTA会長などを務めた川岸さんと学童クラブでボランティアをしていた古堺さんが9年前に設立。職員は非常勤を含め約300人に増え、18事業所を久喜周辺の3市2町で運営する。7月からは県の委託を受け、小学3年生までの発達障害児に個別対応する利根地域療育センターも運営している。問い合わせは、あかり(0480・24・2060)。

進路自ら選択 仕事通じ一人立ち

彼を見た職員が「すごいね」と声をかけたのが、奇跡の始まりでした。2年後には30歳を歩き、心の中にたまってた言葉があるように出てきました。「何もできない子」と決めつけてしまっただけ、何も生まれません」

川岸「私は障害がある長男を育てましたが、障害を抱えることで不幸になるとは思っていないんです。息子は23歳の時、くも膜下出血で亡くなりましたが、5年半勤めた会社では、彼のおかげで社内が『やさしい雰囲気になる』と言われていました。私自身も人生の価値観が変わりました。むしろ彼は幸せを与えてくれるのだと実感しました」

古堺「障害者の親は子の公園デビュー、入学、就職と、障害を受容する厳しい場面がある。川岸さんも経験し、たいへんだったろうと思います。周りとは比べないで生きていければ、どれだけ楽か。この『比べない』という気持ちは大切ですね。人にはそれぞれに幸せの形があるはずですから」

「教育関係者を対象に講演もされています。川岸「放課後等デイサービスなど障害児の支援の場がいろいろあるというところが、普通学級の先生たちには、あまり知られていない。小学、中学、高校と先生たちはそれぞれの現場でがんばっていらっしゃるのに、無理もありません。でも、学校を出たら終わりではなく、人生をトータルで見たい」

古堺「私たちは就労支援の事業所も運営しています。昨年から県の最低賃金を保証する事業所もつきました。障害があるから『これしかできない』というのではなく、自身で進む道を選択してもらおう。彼らの可能性を信じてあげれば、仕事を通じ一人の社会人として自立することができま

す。川岸「支援の仕事は100%、人と人の関わりです。機械がとって代わることはできない。決してなくならない仕事です。100年後も、互いに寄り添って生きていきたいと考えました。職員にとってはバイブルのようなものです」

古堺「障害のある人も夢や希望に満ちた人生を全うできる社会を目標に掲げました。人としての生き方にも通じるので、あるお寺は『檀家の皆さんに読んでもらいたい』と、小冊子を書庫に置いてくれました」

川岸「小冊子には『ダメと言わない』という項目があります。あかりでは職員が『ダメ』という言葉を使うのは禁止なんです。『ダメ』の一言で片付けず、なぜそうなのか、ていねいに説明してくださいという意味です。そういう関わり方をすると、相手に優しくなれます。世の中全体がそうなら、もっと生きやすいと思いませんか」